

以上が、今回私たちが行いました調査の概要になります。

それでは、続きまして各調査の成果報告に移っていききたいと思います。まずは、西田先生にバトンを渡して、「シラバス調査」についてお話しいただきます。

西田先生、よろしく願いいたします。

2. 新たな方法論1——シラバス調査

では、ここからは私、和光大学の西田桐子よりシラバス調査について、お話をさせていただきます。まず、大まかに本調査の目的と方針についてお話しした上で、どのような手順で調査を実施したのかを具体的にご説明いたします。そして、今回はほんの一部のみとなりますが、調査結果の分析についても皆さんにお見せしたいと思っております。

シラバス調査の概要

まず、本シラバス調査の目的ですが、日本全国の大学で開講されている比較文学比較文化関連科目による教育の実態を明らかにすることを目指しました。そして、この実態を明らかにするための方針を次のように定めました。2021年度の全国の大学のシラバスを調査し、比較文学比較文化を教えている科目の情報を収集し、表にまとめるという方針です。シラバスは、基本的に各大学がウェブ上に公開していますので、それらを活用いたしました。とはいえ、大学ごとに検索条件や検索可能な範囲が違っているため、調査は一筋縄ではいきませんでした。

科目情報の収集には、いくつかの項目を立てて情報を収集していきました。例えば、どの大学のどの学部で行われている科目なのか、担当教員の名前、その教員の専門、また、科目名に加えて、授業題目も収集しました。授業題目は、科目名とは別に、授業の内容に当たるものになります。その他にも、対象とする国、また使用している教科書についての情報も収集しています。特筆すべきは、比較文学比較文化の性質を受け、科目の種類についても調査している点で、選択肢から選ぶ方式を採用し調査しました。

それでは、実際にどのようなものを作ったのかをお見せしたいと思います。こちらはサンプルとなりますが、このような形式のエクセル表を私たちは作りました（※発表時に提示した表は掲載しない）。大学名、対象となる学年、担当教員、担当教員の専門、科目名や授業題目などが記されています。授業題目は、大学によって設けられていない場合もありますので、その際には調査者にシラバスの内容から判断して題目をつけていただきました。他にも、この列は科目が対象とす

る国、こちらは選択式の科目の種類となっています。そして、使用教科書の欄、最後に、こちらの列がシラバスのURLを貼り付ける場所となっています。本調査では、主として、このようなエクセル表を作成することを通して、科目情報の収集に取り組みました。

では次に、調査の目標ですが、比較文学比較文化教育の実態を把握するために、可能な限り多くの科目情報を収集することを目指しました。社会調査の言葉でいえば、全数調査としての質を上げるのを目標にしたということになります。

「可能な限り多く」収集するという目標をどのように実現するかということで、色々考えたのですが、最終的には人海戦術で乗り切りました。2021年度のオンキャンパスジョブ（以降、「OCJ」と略記）によって、このような大規模な調査を実施することができました。2021年度OCJの経費で、延べ9人の大学院生を雇用し、科目情報の調査をもとにしたエクセル表の作成やデータの収集・整理を行いました。これによって、全数調査の母集団を特定し得るビッグデータの収集が可能となりました。

ここからは本調査の手順についてお話しします。先に断っておくと、これからお話する調査手順は、最初からこの形を目指して進めていったというよりは、試行錯誤した結果、最終的にこのような形になったといえます。本調査は、大まかに第一次から第三次の三段階の調査に分けることができます。さらに、追加調査の実施とともに、公開されているシラバスをPDFファイルの形で収集しています。最後には、データの質を高めるためのスクリーニングも実施いたしました。

具体的に、第一次から第三次調査で、どのような調査を行ったかということについてご説明させていただきます。本格的に調査を始める前の予備調査として、比較文学や比較文化についての教育が行われている大学を、井上先生と今橋先生を中心に、ピックアップしていきました。この際には、大学だけではなく、比較文学比較文化教育を行っていると思われる教員の目星をつけるという作業も同時に行っています。

予備調査をもとに、第一次調査、別名「大学ベース」という調査を実施いたしました。これは各大学のシラバス検索システムを用い、科目名やキーワードの検索条件に「比較」と入れて検索するという方法で行った調査です。大学全体で「比較」という語が用いられている科目を検索し、その中からシラバスの内容を精査・検討した上で、比較文学比較文化関連科目と思われる科目を収集していくという方針をとりました。つまり、大学ごとに比較文学比較文化関連科目を収集するというのが、第一次調査になります。

第二次調査は、「大学ベース」とは別の角度からの調査となります。こちらは「人ベース」とも呼んでいるのですが、比較文学や比較文化関連科目を担当している可能性が高いと見込まれる日本比較文学会の会員を対象とし、会員が本務校で担当している科目を調査しました。ここでは、会員の名前でシラバスの検索をし、担当科目をひとつずつ確認していくことで比較文学比較文化関連科目の収集を行いました。

そして、第三次調査では、第二次調査の結果をもとに、比較文学比較文化関連科目を実施している可能性の高い未調査の大学を洗い出し、調査を行いました。第一次調査では調査対象から漏れてしまっていた大学について、第一次調査と同様に大学ごとのシラバス調査を実施したということになります。

こうした第一次から第三次までの三段階の調査を行った後に、さらに追加調査として、採取した比較文学比較文化関連科目の担当教員が日本比較文学会会員か非会員かということも調査し、エクセル表に追記しております。これは、研究と教育の相関関係を考える際に有効なデータとなるだろうという見込みから、実施いたしました。

エクセルファイルの作成とともに、シラバスそのものの収集も行っています。第一次から第三次調査で採取した1500を超える全科目について、シラバスのウェブ公開ページをPDFファイル化し、収集いたしました。これによって、万一公開時期が過ぎてしまっても、常時シラバスを参照できるという体制を取ることができました。

この第一次から第三次調査、さらに追加調査も含め、ここまでの調査で、OCJによって調査をお願いした大学院生9人、この方たちの総調査時間は500時間を超えております。この500時間には、調査のとりまとめを担当した私の作業時間や、予備調査や調査範囲の絞り込みなどの作業を担ってくださった井上先生や今橋先生の作業時間は、含まれておりません。

この後に、さらにデータの質を高めることを目指し、スクリーニングを実施しました。科研のプロジェクトメンバーによって、実際に比較文学比較文化を教えている科目かどうか、1500を超える科目についてひとつひとつシラバスを見ながら精査していきました。最後に行ったこの工程では、PDFファイルで収集していたシラバスが大活躍しました。

スクリーニングは、科目名と教育内容が本当に一致しているのか、比較文学比較文化について教えている科目なのか、というのを確かめていくという作業です。一致していない例としては、「比較文学特別研究」という科目名だが、シラバスの内容を見てみると卒業論文の執筆指導を行う授業で、比較文学比較文化の教

育を行っている授業ではないということがありました。他にも、「比較文化入門」と書いてはあるけれども、ふたを開けてみたら、図書館の利用の仕方をはじめとする資料収集の方法を教える授業だったということもありました。

調査結果にも少し触れますと、第一次から第三次に及ぶ総調査時間500時間を超える調査によって1506の科目を採取しました。そして、そこからさらに比較文学比較文化研究を専門とする研究者7名によるスクリーニングによって絞り込んだ結果、最終的に、比較文学比較文化の教育を行っている866の科目を採取することができました。ちなみに、開講大学数は99(国公立31、私立68)となっております。このシラバス調査は、人海戦術に加えて専門知も動員した大規模な調査となったといえるのではないのでしょうか。

現在、このシラバス調査の結果をもとに、次にお話しいただく町田先生が統計分析を行ってくださっています。こちらは今まさに進行中ですので、本日は、そのほんの一部をお見せしたいと思います。

シラバス調査の分析

では調査の概要についてご説明したところで、次に調査の分析について少しだけご覧いただきたいと思います。

まず、国公立、私立大学の割合に着目してみましよう。比較文学比較文化関連科目が開講されている大学数でみると国公立と私立の割合は31%と69%となっております。そして、開講されている科目数の割合も国公立31%、私立69%となっており、奇跡の一致を見せております。一方で、全国の大学数の割合は国公立23%、私立77%となっておりますので、国公立と私立大学における比較文学比較文化関連科目の開講状況に大きな偏りはないといえるでしょう。

次に、教育と研究の関係を考える上でかなり興味深い結果になってくるのですが、担当教員が比較文学会員かどうかに着目してみましよう。すると、全科目数866のうち、525は非会員が担当している科目でした。つまり、全科目のうちの実に半数以上となる61%を、日本比較文学会の会員以外の方が教えているということが、今回明らかになりました。

そのほかにも、担当教員の専門分野に着目すると、比較「文学」研究ですから予想通りかとも思いますが、「文学」の方が53.5%で圧倒的に多かったです。そして、次に目立つのは、「美学・芸術学」の方で11.7%を占めています。面白いのは、「人類学、地域・文化」の中の、特に「地域・文化」を専門とする方が9%にのぼっているという点です。このことから、比較文学比較文化研究が地域・文化研究と密接に結びついている、という仮説が立てられるかもしれません。